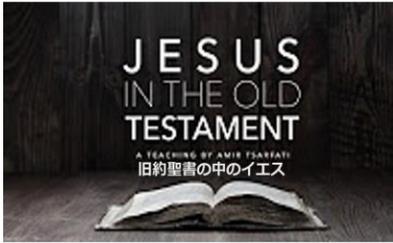


Jesus in the Old Testament 旧約聖書の中のイエス



英語版オリジナル 2015年12月31日公開 : <https://youtu.be/PVltBigi7xs>

メッセージ by Amir Tsarfati /Behold Israel : <http://beholdisrael.org>

日本語訳 by ガスタフソンあつみ

※2017年6月現在、日本語字幕版はまだ出来ていません。

では、旧約聖書の中のイエスについてお話ししましょう。このテーマを選びたかった理由は、私が特に懸念していることがあるからです。世界中を回っていると、主に非ユダヤ人の信者の中で、旧約聖書に関する知識と理解が全くないか、あっても非常に限られたものである人たちが増えてきていることに気づかされます。ショックな事に、中には、新約聖書に詩篇が付いたものだけを持ち歩いている人たちまでいるのです。それは聖書の半分なんですから、半額しか払ってなければいいですが。でも本当にビックリしました。誤解しないでください。私は新約聖書が旧約聖書ほど重要ではないと言っているのではないんです。私が言いたいのは、旧約聖書は新約聖書に劣らず大事だということです。新約が「新しい」のは、「古い」旧約があるからに他なりません。大事なことですが、キリストご自身が、ご自分こそがメシアであることを人々に説明し、証明する機会があった折に、一度も新約聖書を用いられませんでした。事実、イエスは、ただの一度も新約聖書から教えられたことはありません。イエスは新約聖書を引用されたことすらありません。パウロも新約聖書を引用したことはありません。ペテロもそうです。ヨハネは一度も新約聖書に言及したことはありませんでした。なぜなら、彼らは皆、それを執筆していたからです。ですから、一世紀という時代に、「聖句」や「神のみことば」と言ったら、それは何を指していたでしょう。旧約聖書です。では、イエスご自身がしばしば引用された聖書の中のそんなに重要な部分を、一体どうして無視することができるのでしょうか。イエスはサタンの誘惑を受けられた時でも、またずっと後に、ルカの福音書の終わりで、エマオへの道のりを歩きながら語られた時にも、それを引用されました。

私は、多くの人たちが旧約聖書に向き合うことを怖がっていることに気づきました。彼らは、その本には、裁きや、神の厳しさばかりが詰まっていると思っているのです。あるいは、新約聖書はキリスト教徒のためのもので、旧約聖書はユダヤ人のためのものだと思っている人たちもいます。言わせていただきますが、イエスはクリスチャンではありませんでした。

た。申し訳ありませんが、事実です。あえて言うのであれば、イエスはユダヤ人でした。私に言えるのは、神はユダヤ教徒ではないということです。神は天と地を造られたお方です。ですから、型にはめて考える必要はありません。信者にとって、新約聖書を理解し、また、イエスがメシアであり主であることを理解するためには、旧約聖書を学び、研究し、理解することが不可欠であることを、私たちは理解しなければなりません。

多くのクリスチャンは、二つの罫のうちのどちらかに陥っていています。一つはイスラエルを偶像化すること。もう一つは、神が教会をイスラエルに置き換えたと考えて、聖書におけるイスラエルの役割を完全に否定することです。両者とも、明らかに、聖書の理解がないことに起因しています。

なぜクリスチャンが、特に非ユダヤ人のクリスチャンが旧約聖書のことを知らなければならないのかと問う人たちがいます。もしも、旧約聖書がユダヤ人のためのものであるとするならば、みなさんに知っておいていただきたいことがあります。ペテロの手紙第一からお読みします。第2章9節です。みなさんとご一緒に朗読したいと思います。ペテロの手紙第一2章9節です。

「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です。(ペテロの手紙第一2:9-10)」

あなたがたは、好むと好まざるとに関わらず、イスラエルのオリーブの木につぎ合わされたのです。あなたがたはその油にあずかる者であり、かつて野生種のオリーブの木であったあなたがたが、栽培種のオリーブの木につがれたのです。もうそこから逃げることはできません。これまでです。あなたがたにはもう、「選ばれた種族」という肩書があるんです。神の民ではなかったあなたがたは、今や、「神の民」となっただけではなく、「王である祭司」なのです。祭司であるならば、皆さんは聖書を知っていなければなりません。祭司職がどういうものかを理解していなければならず、一番最初から、遡って学ばなければなりません。

私が旧約聖書の中のイエスについて教えようと思いついたのは、私自身が新約聖書の聖句を一節も読むことなく、主を知るに至ったからです。ご存知でしたか。私は新約聖書を持っていませんでした。旧約聖書しか持っていなかったんです。イスラエル人の家には、たいがい旧約聖書が置いてあるものです。私は預言者の書を読みました。私にキリストのことを教えてくれた人たちは、新約聖書は一切使わず、旧約聖書を使いました。もしも、新約聖書の話がされていたら、当然、私は初っ端から拒否していたことでしょう。というのも、私たちユダヤ人にとっては、新約聖書というのは、新しい宗教を始めるために、非ユダヤ人のために書かれた非ユダヤ系の本であるからです。私は、旧約聖書の中にある驚くべき預言の数々、とりわけ、イザヤ書の驚くべき預言を読んだ時のことを覚えています。イザヤ書第53章に差し掛かった時、私にはもうどうにもならなくなりました。私は決断を下さなければなりません。私は決断しました。そして家から追い出されたんです。どこにも行く場所がありませんでした。しかし、旧約聖書は私にとって、とても真に迫るものだったので、私はイエスがメシアであることを認めざるを得ませんでした。その決断に対してどんな代価を支払わなければならないのかは、分かっていませんでした。数時間後には、それを知ることになりましたけど。でも、私には一つ言えることがあります。それは、イエスこそがメシアだということです。そしてイエスは旧約聖書の至る所におられるのです。私が初めて新約聖書を読んだのは、軍役についていた時でした。装甲部隊にいた私は、戦車の中で読んでいたんです。戦車が点検・修理に入ると、私はその中に忍び込んで、ズボンのポケットにしよばせていた小さな新約聖書を、小さな懐中電灯を使って読むんです。私はもうびっくりしました。それは、誰かをユダヤ教とは別の信仰に導くために、ユダヤ教と関係のない事柄について書かれた、非ユダヤ人のための本ではなかったんです。引用されているのは、すべて、私の知っている旧約聖書でしたし、イスラエル家の迷える羊たちのもとに来られたメシアのことが書かれていましたし、それに、(バプテスマの) ヨハネもバプテスト派ではありませんでした。

今日は、ルカの福音書第24章から始めたいと思います。ルカの福音書第24章では、最高の福音が見事に締めくくられています。言うまでもなく、これはイエスが死者の中から蘇られた直後のことです。ご存知の通り、それは日曜日の朝のことで、女たちが墓に行ってみると、

墓は空になっていました。すると、御使いが現れて、「イエスは死んでいません。ここにはおられません。おっしゃっていた通りです」と告げました。彼女たちは走って行って、ペテロが来て、他の人達も来ました。そして彼らは、墓が空っぽであるのを見ました。そこで13節の場面になります。

「ちょうどこの日、ふたりの弟子が、エルサレムから十一キロメートル余り離れたエマオという村に行く途中であった。そして、ふたりでこのいっさいの出来事について話し合っていた。話し合ったり、論じ合ったりしているうちに、イエスご自身が近づいて、彼らとともに道を歩いておられた。しかしふたりの目はさえぎられていて、イエスだとはわからなかった。イエスは彼らに言われた。『歩きながらふたりで話し合っているその話は、何のことですか。』すると、ふたりは暗い顔つきになって、立ち止まった。(ルカの福音書24:13-17)」

皆さんには想像できますか。彼らは歩きながら、イエスの復活の話をしているのに、惨めな気持ちなんです。主の喜びがなく、いつも元気がなくて憂鬱で抑制されているクリスチャンたちを、私は何人も知っています。彼らはどういうわけか、イエスが十字架に架かったままの所で止まってしまっていて、もうイエスがそこにはおられないことを忘れてしまっているんです。イエスは復活されました。あの日、多くの人が十字架に架けられました。その月、またその年に、十字架に架けられた人たちはたくさんいました。十字架刑になるのは、そんなに難しいことではなかったんです。何かちょっとローマ人の気に入らないことをしただけで、もう十字架に架けられていたんです。でも、何も妙なことが起こらないようにと、墓の傍に二人のローマ兵が立つという名譽に預かった人は、他には誰もいませんでした。イエスの復活に関しては、弟子たちよりも、ローマ軍の方にもっと信仰があったんですから、驚かされますよね。

弟子たちには、イエスがそこにおられないことが信じられませんでした。ローマ人たちは兵士を二人置いて、墓を封印し、予想外の事が起こる余地が全くないようにしていました。死んでいるのに、二人の武装した守衛にエスコートされたのは彼ひとりだけでした。日曜日の朝一番に、転がされていた石が押し戻されていて、兵士たちはいなくなっており、女たちが入ってみると、イエスは消えていました。イエスはそこにはおられなかったのです。そし

て御使いたちが現れます。二人の弟子たちが歩きながら話し合っていたのは、そのことでした。

彼らは実に、最も素晴らしいこと、つまり、主の復活について話し合っていたのに、悲しんでいたんです。復活の意味を理解していなかったからです。イエスの力が、主に、その復活にあることを理解していなかったからです。甦るためには、まず、死ななければなりません。死んでいなければ、死者の中から蘇ることはできません。

エマオへ向かうあの道で、イエスが彼らに尋ねます。「なぜそんなに暗い顔をしているのですか。」すると、二人のうちのクレオパという名の弟子が、18節において、こう答えます。

「エルサレムにしながら、近ごろそこで起こった事を、あなただけが知らなかったのですか。」ここから分かるのは、神が、その主要なユダヤの祭日の間にそれらすべてのことが起こるようにし、すべての人がその出来事が起こったことを知り、聞き、理解するようにされたということが、いかに驚くべきことだったかということです。その出来事の力は、すごいものでした。

クレオパ：「あなただけが知らなかったのですか。」

イエス：「どんな事ですか。」

「『ナザレ人イエスのことです。この方は、神とすべての民の前で、行ないにもことばにも力のある預言者でした。それなのに、私たちの祭司長や指導者たちは、この方を引き渡して、死刑に定め、十字架につけたのです。しかし私たちは、この方こそイスラエルを贖ってくださいと望みをかけていました。』（ルカの福音書24:19-21）」

だから、彼らは暗い顔つきをしていたんです。「**私たちは、この方こそイスラエルを贖ってくださいと望みをかけていました。**」「望みをかけていました」と。過去形です。彼らの望みは消えてしまいました。イエスはそのお方ではなかった。イエスは解放してくれなかった。我々はまだローマの支配下にいる。彼らは、そのように、メシアに関して誤った見解を持っていました。だから、彼らは悲しんでいたのです。彼らは言いました。

「『私たちは、…望みをかけていました。事実、そればかりでなく、その事があってから三日目になりますが、また仲間の女たちが私たちに驚かせました。その女たちは朝早く墓に行っ

てみましたが、イエスのからだが見当たらないので、戻って来ました。そして御使いたちの幻を見たが、御使いたちがイエスは生きておられると告げた、と言うのです。それで、仲間の何人かが墓に行ってみたのですが、はたして女たちの言ったとおりで、イエスさまは見当たらなかった、というのです。』(ルカの福音書24:21-24)」

彼らは、イエスの死について話し合っただけでなく、実は、復活についても話していたのです。イエスは消えてしまっていました。イエスは生きておられるのです。なのに、彼らは悲しんでいます。

「するとイエスは言われた。『ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。』それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。

(ルカの福音書24:25-27)」

いいですか、「聖書全体の中で」です。当時、聖書と言えど何だったでしょう。旧約聖書です。イエスは、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされました。聖書には、イエスが実際に何を言われたのか、書かれていません。そうなんですよ！何とおっしゃったんですか。私はその説教の覚書が欲しいんです。これより優れた教えはありません。イエスは、その道中、彼らにすべてのことを教えられたのです。聖書全体を網羅して、きっと創世記第1章1節から、最後まで、ご自身に関するところを示されたはず。「ほら、それはわたしのこと、それもわたしのこと、それも、これも、あれも、わたしのこと。彼はそう語り、彼はこう語った。」おもしろいのは、彼らがそれがイエスのことであると一旦理解すると、イエスご自身が、44節で、彼らにこうおっしゃったことです。

『わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。』(ルカの福音書24:44)」

必ず成就するのです。イエスは一部分、あるいは半分だけを成就するために来られたのではありません。イエスは半分メシアではありません。イエスはたぶん、おそらく、もしかしたら、メシアなのではなく、断定的にメシアなのです。そして、すべてのことが成就されなければなりません。誰かをナザレからはるかベツレヘムまで連れ戻すことが容易ではないなら、我々は、皇帝アウグストが人口調査を命じて、ヨセフがはるばるベツレヘムに戻ってきて、イエスがそこで生まれ、預言者の言葉が成就されるようにしよう。ベツレヘム・エフラテよ。そこがわたしの息子が生まれる場所となる。すべてのことが成就しなければなりません。部分的にでも、いくばくかでもなく。イエスは、モーセの律法だけにではなく、預言者にも、詩篇にも書かれていて、それらは皆、ご自分に関することなのだとおっしゃっています。わたしがイスラエルの望みなのであり、わたしがイスラエルのメシアなのであり、それは、あらかじめ記され、預言されていて、あなた方の聖書の全体に、至る所にあるのです。

そこで私は皆さんに、モーセの律法の中のイエス、また、預言者、詩篇の中のイエスを少しお見せしようと思いました。モーセの律法ですが、これは非常に興味深いです。モーセによる最初の五書です。イエスご自身が、ヨハネの福音書第5章で、こうおっしゃっておられます。

「『もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことだからです。(ヨハネの福音書5:46)』

「モーセを信じていれば、わたしのことを信じなくても大丈夫だと考えてはいけません。モーセが語ってるのはわたしのことなのです。」

では、私が聖書を読んでいて見つけたすごいことを、少しご紹介したいと思います。

まず一つ目は、創世記第1章の1節から19節まで、神が世界を創造し始めた時のことです。聖書には、「**神が『光よ。あれ。』と仰せられた**」とあります。

創世記1章において、神は「光よ。あれ。」と、第3節でおっしゃいます。どこでしょう。それは第1日目だったんです。太陽が造られたのはどこでしょう。というのも、私たちは、この世界の光の源は太陽であると考えからです。ところが、太陽が造られたのは第4日目で

した。では、太陽が造られたのは第4日目なのに、なぜ、神は第1日目に「光よ。あれ。」と言われたのでしょうか。そのことを考えてみたことがありますか。文字通り、神は、何らかの形で、光の源、それも本物の究極の光の源に、その光を輝かせることを許されたのでした。「息子よ、出番だ。お前の光を輝かせるのだ。」さあ、どうして私にはこのことがそんなにはつきりと分かるのでしょうか。

A. 私には分かるから。

B. 詩篇72章17節を読みましょう。

皆さんは英語訳された聖書を読まなければならないから、私は時々、お気の毒だなと思うんです。というのも、原文から失われてしまっているものがたくさんあって、名前や言葉に含まれる意味もたくさん失われているからです。詩篇72章17節は、皆さんの聖書にはこんな風に書かれています。

「彼の名はとこしえに続き、その名は日の照るかぎり、いや増し、... (詩篇72:17)」

ヘブル語の原文では何と書かれているか、ご存知ですか。ヘブル語ではこう書かれています。「彼の名はとこしえに続く。彼の名は日の以前にあった。人々は彼によって祝福され、すべての国々は彼をほめたたえる。」彼が、世の光だったのです。太陽が造られるよりも前に。LPhNY-ShMSh YNYN ShMV VYThBUrKV BV KL-GVYM Y'aShUrVHV. 太陽よりも前に、メシアはおられました。聖書にはそう書かれているんです。私の聖書には、そう書いてあるんです。残念ながら、皆さんの聖書にはそのようには書かれていません。だから訂正しておいてくださいね。お願いします。でも、皆さんに理解していただくのが大事なんです。なぜ、イエスが「わたしは世の光です」と言われたのか、これで理解できるんです。どうしてそう言われたのだと思いますか。イエスは第一日目からそこにおられたのです。被造物の一部としてではなく、創造主に属するお方として。「出番だ。お前の光を輝かせなさい」と、御父が言われたのです。興味深いですね。今お話ししたのは、詩篇72章17節ですから、ちゃんと訂正しておいてくださいよ。

それから創世記3章8節です。創世記3章にある話は誰でも知っていますね。神がおられて、アダムがいて、エバがいたこと、それから二本の木が立っていて、彼らはそれらの木の実を食べてはいけないことになっていたことも、知っていますね。知ってのとおり、それは善悪

の知識の木と、もう一つは、そう、命の木でしたね。おもしろいですよね。なぜ、知識と命なんでしょう。なぜなら、神がみことばにおいて、「わたしがいのちです。わたしが真理です。そしてわたしが道なのです」と言われるからです。そして、みことばには、「**主を恐れることは知恵の初め、(箴言9:10)**」「**主を恐れることは知識の初めである (箴言1:7)**」と書かれているからです。ですから、もし、あなたが善悪の知識の木や、命の木から実をとって食べなければならないと言うなら、それは、神だけでは不十分だと言っていることになるのです。これほど神にとって侮辱的なことはありません。「あなたがすべてではない、あなたは私にとって何よりも大切なものではない、私にはどこか別の場所にもっと必要なものがある」と言っているんです。彼らがその実をすでに味見し、罪悪感と恥ずかしさでいっぱいになった後で、主は園の中を歩かれていた、と聖書に記されています。

そして8節は、非常におもしろいんです。ユダヤ人は長い長い年月の間、ヘブル語を話していました。しかし、紀元前一世紀、紀元一世紀から後は、ヘブル語はもはや日常生活のことばではなくなり、むしろ典礼用に使われていました。そのため、ラビが一般の信徒たちに教え、モーセ五書の教えや預言者の書を詳しく解説する際には、タルグムと呼ばれるところの、彼らの言語、つまりアラム語やギリシャ語など現在ある言語に翻訳されたものを用いていました。一世紀から伝わるオンケロス・タルグムでは、創世記3章8節は次のように書かれています。「**アダムとエバは主のメムラーが園を歩いているのを聞いた。**」メムラーというのは言葉、つまり神のことばです。ですから、彼らは神のことばが園を歩いているのを聞きました。神のことばとは、誰でしょう。その方について、ヨハネは言いました（ヨハネの福音書1:1-3、14）。「**初めに、ことばがあった。(ヨハネの福音書1:1)**」イエスご自身です。皆さんには、想像できますか。キリストご自身がエデンの園にいらっしゃって、歩いておられたのです。被造物の役割ではなく、創造主の役割を担われました。彼らに見ることができたのは、このお方でした。歩かれたのは、このお方でした。彼らが恐れ、その前に入るのを恥じたのは、このお方でした。

そして創世記第3章15節で、あの罪に対する罰が与えられた際に、「**女の子孫(種)**」のことが出てきます。はばかりながら、女性には種がありません。女性にあるのは卵です。ここで「**女の子孫(種)**」が出てくるのは、なぜでしょう。歴史の中で、女性が、男性のものではない種を持ち、明らかに神の性質を持つ人間に生を与えたというケースは一つだけで、それは

イエスに他なりませんでした。そこで、「女の子孫(種)」と呼ばれることのできる人は、歴史全体において、ただ一人しかおらず、それはイエスであり、彼こそが、そのかかとで蛇の頭を砕くお方なのです。彼こそが、サタンを打ち負かすことのできるお方です。彼お一人だけです。

創世記第4章もおもしろいです。私たちは今、創世記1章、2章、3章と見てきましたが、創世記第4章で、私たちは羊という語と、罪という語を両方初めて耳にします。罪の贖いのために子羊がほふられなければならないというのは、興味深いことだと思いませんか。その二つは、最初から組み合わさっていました。

創世記4章2節—羊

創世記4章7節—罪

アベルはささげ物として羊を持って来ますが、神は、カインの心、また彼の意図を罪とみなされました。そのように、この二つの言葉が並んで出てきます。そしてまた、この二つの言葉は再び、創世記第22章において、驚嘆するような形で出てきます。イサクを捧げる場面です。イサクはモリヤ山に連れて来られると、父親であるアブラハムに「お父さん、主に捧げるための羊はどこにあるのですか」と、尋ねています。すると、アブラハムは「**神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えてくださるのだ。(創世記22:8)**」と答えます。興味深いのは、12節で、神が介入され、アブラハムがイサクを殺してしまう前に彼を引き留め、そして、「わたしはあなたがわたしを信じていることが分かった。**あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。(創世記22:12)**」と言われたことです。興味深いですね。あなたの「ひとり子」という言い回しが、この章には2回出てくるんです。イエスがヨルダン川に入られた時に、天が開いて、「**これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。**」という神の声が聞こえた時と、全く同じなんです。「わたしのひとり子」、同じ言葉です。これはすごく興味深いことなんです。なぜなら、神がご自分の御子になさろうとしていることの予型を、この章において見る事ができるからです。だから、人々がヨルダン川に向かって歩いてくるのを見ていたヨハネは、ユダヤ人であってバプテスト派ではありませんでしたが、ヨハネの福音書1章29節で、自分のほうにイエスが来られるのを見て、「**見よ、世の罪を取り除く神の小羊。**」と言ったのです。ここでも、羊と罪が対になっているんです。

イエスは至る所におられます。旧約聖書の全体で、至る所におられるんです。ヨハネは、祭司の家系の出身だったので、それを見ることができました。彼は旧約聖書の教えや、律法の教えを受けて育ちました。彼には、贖いが必要であること、それもイスラエルの民の罪のため、イスラエルの民や祭司やレビ人たちの罪のためだけにではなく、全世界の罪のための贖いがないと分からないことが分かったのです。それは、ユダヤ人には未知の概念でした。贖罪の日に、世界の罪の贖いのために祈っているユダヤ人はいません。そこにはイスラエルの国のことしかありません。「**荒野で叫ぶ者の声がある。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ。』(マルコの福音書1:3)**」ヨハネには皆さんおひとりひとりが見えたんです。彼には、自分の方に近づいてこられる方が、ただの人ではないこと、そのお方が神の子羊であることが、見て取れたんです。そしてそのお方は、世の罪を覆うのでもなく、隠すのでもなく、全世界の罪を取り除かれるのです。その通りですね。アーメン。

そのように、イエスはモーセの書の全体を通して、至る所におられます。創世記第49章のヤコブの祝福の中でも、シロのことが書かれています。これについては、先日お話ししました。「**シロが来て、国々の民は彼に従う。(創世記49:10)**」ユダ族から出るシロです。全部、書いてあるんです。

では、話を詩篇に移すと、150篇ある詩篇の中には、メシアに関する詩篇が16編あると言うことができます。詩篇全体の10パーセント以上がメシアに関するものなんです。ダビデのものでも、アサフの子らのものでも、コラの子らのものでも、どれでも、彼らは基本的に神の霊によって動かされ、キリストご自身の言葉を語ったのです。しかし、彼らはキリストが来られるよりもずっと前の時代に生きていたので、自分たちが実際に誰のことを引用しているのか知りませんでした。

一つ例をご紹介します。これは、ほんの一端です。詩篇第22章です。詩篇第22章は、実際の磔刑について語っている、驚くべき詩篇なんです。ダビデがすべての詩篇を書いたわけではありませんが、これはダビデによって書かれたものです。詩篇22章の初めにこう書か

れています。「指揮者のために。『暁の雌鹿』の調べに合わせて。ダビデの賛歌」ダビデ王がこの詩篇を書いたのです。今、読んでもらっていいですが、これは衝撃的な詩篇です。ずっと読み進んで、10節からお読みします。

「生まれる前から、私はあなたに、ゆだねられました。母の胎内にいた時から、あなたは私の神です。(詩篇22:10)」

キリストは母の胎内ですでに神の手によって形作られ、形成されていたんです。それからこう言っています。

「どうか、遠く離れないでください。苦しみが近づいており、助ける者がいないのです。数多い雄牛が、私を取り囲み、バシヤンの強いものが、私を囲みました。彼らは私に向かって、その口を開きました。引き裂き、ほえたける獅子のように。私は、水のように注ぎ出され、私の骨々はみな、はずれました。私の心は、ろうのようになり、私の内で溶けました。私の力は、土器のかけらのように、かわききり、私の舌は、上あごにくっついていています。あなたは私を死のちりの上に置かれます。犬どもが私を取り巻き、悪者どもの群れが、私を取り巻き、私の手足を引き裂きました[わたしの手と足を刺し貫いた-口語訳]。(詩篇22:11-16)」

ダビデは刺し貫かれましたか。違いますね。ダビデは、メシアのことを語っているんです。彼は理解も知識もないまま、神の言葉と御霊に従って、神が語られるままに書いたのですが、それから3000年経った今、それを読む私たちには、それがまさしく誰のことなのかが分かっています。

「わたしの手と足を刺し貫いた。私は、私の骨を、みな数えることができます。彼らは私をながめ、私を見ています。彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにします。主よ。あなたは、遠く離れないでください。(詩篇22:16-19)」

キリストの受難が何ともありありと描かれています。しかも、それが詩篇に書かれています。

それでも不十分であれば、イエスは預言者の書の至る所にもおられます。事実、預言者の書の中には、以下の事が示されています。人間が神から切り離されていること。約束された解決法。新しい契約。超自然的な誕生。拒絶される初臨。キリストの苦しみ。キリストの犠牲。そして勝利の再臨までも、すべて、預言者たちの書の随所に見ることができます。そして、私が最も驚嘆するのは、もちろん、以前にもお話ししましたが、イザヤ書第53章です。イザヤは言いました。

「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。(イザヤ書53:3)」

すごいですよね。それからイザヤはこう言っています。

「彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。…私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。彼は暴虐を行なわず、その口に欺きはなかったが。(詩篇53:5-9)」

イザヤは、罪のない人が私たちすべての者のために殺されたと言っています。私たちはみな、さまよってしまいました。しかし、主は、彼に、私たちのそむきの罪、私たちの罪、私たちの咎を負わせられました。驚くばかりです。

それでは、新しい契約があることを、どうやってユダヤ人に伝えたらいいでしょう。新しい契約が、旧約のうちに預言されているのをご存知ですか。預言者エレミヤが、第31章の31節で、次のように書いているのをご存知でしょうか。ここでも、皆さんがお持ちの訳をお気の毒に思うのですが、エレミヤは31節でこう言っています。エレミヤ書第31章31節です。

「見よ。その日が来る。——主の御告げ。——その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。(エレミヤ書31:31)」

皆さんの訳は「新しい契約 [covenant]」となっていますが、ヘブル語では「新しい（一方的な）誓約 [testament]」なんです。

「その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。——主の御告げ。——彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。——主の御告げ。——わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。(エレミヤ書31:32-33)」

もはや文字で書かれた法ではなく、霊になるんです。文字は殺し、御霊は生かすからです。もはやモーセの律法に根差したものではありません。それは、神の恵みに根差したものとなるのです。神は、旧約において、預言者を通し、イスラエルの民に新しい契約を約束されたのでした。

イエスは至る所におられるのです。皆さんに理解してもらえるように、今日はほんの少しだけご紹介しています。旧約聖書中のメシアに関する部分をすべて説明するには、一週間かかるかもしれません。

そして、イエスがおられるのは、そこだけではありません。イエスは、イスラエルの祝祭のすべてにおられます。私たちは、毎年、七つの祭りを祝うのに、それがすべてイエスに関わるものだという事実には、気も留めません。聖書には、コロサイ人への手紙2章16～17節に、こう書かれています。

「こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは、祭りや新月や安息日のことについて、だれにもあなたがたを批評させてはなりません。これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです。(コロサイ人への手紙2:16-17)」

それらのことを祝うことは構いませんし、それらは素晴らしいものです。しかし、それらは影でしかなく、実体はキリストなのです。キリストがそこにおられるのです。ですから、それを見逃さないでください。レビ記23章には、七つの祝祭があります。

- ・ 過越しの祭り
- ・ 種を入れないパンの祭り
- ・ 初穂の祭り
- ・ 七週の祭り（ペンテコステ）
- ・ 角笛を吹き鳴らす祭り（ラッパの祭り）
- ・ 贖罪の日
- ・ 仮庵の祭り

これらはキリストにおいて成就されたのでしょうか。ご覧ください。過越しの祭りは、主の磔刑を物語っています。あの傷のない子羊の死です。覚えておいてください。聖書には、キリストが確かに、私たちの過ぎ越しの子羊であったと、書かれています。パウロがそう書いたんです（コリント人への手紙第一5:7）。これは過去にもう成就しています。

種を入れないパンの祭りはどうでしょう。罪のない主の人生を物語るこの祝祭は、もちろん、イエスがこの地上で生活された時に成就されました。

初穂の祭りはどうでしょう。聖書には、「眠った者の初穂」のことが書かれています。イエスはその初穂でした。主の復活は、初穂の祭りが現実に成就したものでした。祭司が、過越しの後の最初の日曜日に、初穂の束を神殿に持ち込まなければならなかったように、キリストも過越しの後の最初の日曜日に、「眠った者の初穂」になったのです。ですから、これも成就されています。

それから、過越しからちょうど50日を数えると、ペンテコステ（七週の祭り・五旬節）になります。ペンは「5」（ペンテコステ=50）です。七週の祭り、七週は49で、50日目に、シナイ山において律法が与えられたことを祝います。旧約聖書を読むと分かりますが、モーセが石の板を抱えて下山している間に、ユダヤ人たちはもうすでに金の子牛に掛かりきり

になっていました。そしてどうなったかという、その日のうちに、三千人が死にました。おもしろいことに、使徒の働きの手紙で、聖霊が降りて来られたとき、その日に、三千人が教会に加えられました。ご覧のとおり、驚くような形で、これは完全に成就されました。

ですから、四つの春の祝祭が全部、2000年前に成就されているんです。では、秋の祝祭はどうでしょうか。後半の三つです。

ラッパの祭りは、皆が集まって角笛を吹き鳴らす日です。奇妙な祭りですね。でも、理解すれば、そうでもないんです。神は、銀のラッパを二本作るようにと、モーセに命じられました。なぜ、銀なんでしょう。なぜ、二本なんでしょう。なぜ、ラッパなんでしょう。銀は高価な金属ですが、完ぺきではありません。ラッパは、みんなの注目をひきつけるため。なぜ、二つなのか。私は、それは、イスラエルと教会のためだと思います。この二つのグループが、神が「あなたがたはわたしの証人」と言われた人々なんです。興味深いことに、イスラエルと教会が共存するようになったのは、1948年以降ようやくのことですから、今私たちがラッパの祭りの時代に生きており、携拳されるのを待っているということを、私は心から確信しています。

携拳の後、私たちが主と共に戻って来ると、贖罪の日が起こり、イエスの再臨が起こり、イスラエルはゼカリヤ書12章10節に書かれているとおり、嘆き、激しく泣くこととなります。それから、イスラエルはみな救われます。ローマ人への手紙11章に示されている通りの、驚くべき救いのご計画です。ですから、贖罪の日は、将来に起こります。

それから1000年にわたる一千年王国で、主は私たちとともに住まわれます。それはユダヤの祝祭の中でも、最も長くて楽しいものです。当然、これは将来に起こることとなります。

欠けているのは、携拳の正確なタイミングだけです。でも、私たちにはそれが間もなくであることが分かっています。そうですね？私はある人からメールをもらったんですが、その人は携拳のタイミングを誤差48時間以内で予測することができるというんです。そういうメー

ルは大好きですよ。私はそのメールを読みました。素晴らしい内容でした。ただ、間違ってるだけです。彼はあらゆることを網羅して詳しく説明していました。安息年やヨベルの年など、すべてを説明して、その日にちも教えてくれました。私は、その日を知ってるんです。一応、報告しておきます。皆さんには教えませんがね。それなりにお支払いいただかないと。いえ、いえ。でも、考えてみてください。その人は、携拳の日付を知っていると言うんです。イエスご自身が、御子でさえも、その日、そのときがいつであるかを知らないとおっしゃったのに。ですから、明らかに、それは人間がその日、そのときを知ることができるという、誤った前提に基づいています。

しかし、私たちには、イエスが様々な形や姿で聖書の至る所に現れることを見ることができます。それらは、神の顕現と呼ばれます。神の顕現（テオファニー/Theophany）とは、神ご自身の現れ、啓示です。「神」は「テオス (theos)」、そして「自らを現す」は「ファニア (phneia)」。それでテオファニーです。イエスは、人の子として現れたり、主の御使いとして現れたり、メルキゼデクと呼ばれる王として現れたり、ヤコブと格闘した方として現れるなど、様々な形や姿で現れます。ダニエル書3章24～25節もそうです。

ダニエル書7章13～14節では、

**「私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ
(ダニエル書7:13-14)」**

この「人の子」とは誰でしょう。私たちには、イエスご自身が、ご自分のことを「人の子」と自称されたことが分かっています。マタイの福音書20章、24章でも、マルコの福音書10章でも、ヨハネの福音書3章でも、それが分かります。ダニエルの見た「人の子」というのは、イエスご自身であつたに違いありません。

では、創世記14章に登場する、あの謎の王はどうでしょう。アブラハムが彼の甥を奪っていった王たちを追い、その甥を奪い返して来たすぐ後で、彼はメルキゼデクと呼ばれるシャ

レムの王の前に出ます。メルキゼデクとは、「義の王」という意味です。アブラハムは、メルキゼデクに十分の一の捧げものを捧げました。それは、明らかに、メルキゼデクの方が、アブラハムよりも位が高かったことを示しています。実際、彼は神の性質を持った方でした。というのも、十分の一のものや、捧げものをするのは、他でもない神に対してすることだからです。だから、ヘブル人への手紙7章3節に、ペテロによる説明があるんです。イエスは、メルキゼデクの位に等しい方でした。これも神の顕現の一つです。

それから、ヤコブと格闘した、あの名の無い見知らぬ人物がいます。創世記32章で、ヤコブがイスラエルという名を与えられた場面です。ヤコブはその格闘の場所をペヌエル、つまり「神の顔」と名付けました。この話の意味は、ヤコブが、自分は顔と顔を合わせて神を見たと思ったということです。その名の無い人物は、イエスご自身でした。

それだけではなくて、「主の御使い」がギデオンに現れて、彼にこう仰せられました。「**安心なさい。恐れるな。あなたは死なない。**」そこで、ギデオンはそこに主のために祭壇を築いて、これをアドナイ・シャロム（主は平安）と名づけました（士師記6:23-24）。ギデオンは主に語りかけます。主が彼の前におられます。その主とは、誰でしょう。

イザヤ書9章はどうでしょうか。クリスマスの時期になると、よく読まれる箇所です。

「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。」
（イザヤ書9:6）」

預言者イザヤは、「ひとりの男の子」のことを語りますが、何と言っているかというところ、

「その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。」
（イザヤ書9:6）」

その「男の子」とは誰でしょう。その方は、「父」でもあり、「力ある神」でもあるのです。敬虔なユダヤ人なら、また、イザヤのような預言者であればなおさら、ただの人間を「力ある神」と呼ぶようなことは決してないでしょう。

ご覧のとおり、イエスは至る所におられるのです。それでも足りないなら、ゼカリヤ書12章10節において、キリストの再臨の時にイスラエルが嘆き、激しく泣くということについてお話ししましたが、イエスの時代から500年後に成立したバビロニア・タルムードには、ゼカリヤ書12章10節についての解説があります。「**彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。(ゼカリヤ書12:10)**」ユダヤ教のラビによる翻訳であるタルグムには、こうあります。「その嘆きの原因は何か」。その答えは「ヨセフの子、メシアを殺したことが原因であると説明する者が正しい」となっています。これが、問いに対する、ユダヤ人のラビによる解答なんです。至る所にあるんです。イエスが至る所におられるのです。

では、私たちが、何千年も前に与えられたこれらの聖句に寄り頼まなければならない理由とは、何なのでしょう。ローマ人への手紙15章4節にこう書かれています。

「昔書かれたものは、すべて私たちが教えるために書かれたのです。それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。(ローマ人への手紙15:4)」

だから、パウロはローマで囚人として軟禁されていた時に、家の中に座り、ユダヤ人指導者たちを皆招いていたのです。パウロは彼らに哀れみを持っていました。彼は言いました。

「さあ、私は皆さんをお呼びしました。私はあなた方に嘆願しているのです。聞いてください。」

「このようなわけで、私は、あなたがたに会ってお話ししようと思い、お招きしました。私はイスラエルの望みのためにこの鎖につながれているのです。(使徒の働き28:20)」

イエスはあなたの望みですか。イエスが、あなたの人生の光ですか。イエスは、あなたの人生において、今、私たちと共に住んでおられる神のことばですか。二人でも、三人でも、イエスの御名において集まる所には、イエスもおられるのですから。イエスは、あなたと共に

におられますか。あなたは、イエスを知っていますか。それとも、あなたは、十字架に架かったイエスから先に進めなくて、そのために、いつも悲しんでいますか。

あなたはイエスを知っていますか。あなたはイエスの御顔を知っていますか。あなたはイエスのご性質を知っていますか。あなたは復活の力を知っていますか。あなたは、これらすべてのことが私たちに希望を与えるために書かれていること、私たちが経験するすべてのことにおいて、私たちに励ましを与えるために書かれていることを知っていますか。

このために、パウロは、「**私はイスラエルの望みのためにこの鎖につながれているのです。**」と言いました。私は今、望みを持って、ナザレのイエス、ヤシュアが、あなたにとってクリスマス日の小さな赤ん坊ではないことを祈ります。イエスがあなたの人生における光であり、あなたの人生の望みであり、毎日あなたの内にある「ことば」であることを祈ります。また、あなたが聖書全体を通して、至る所にイエスをみとめるように祈ります。あなたはすごく知的なクリスチャンになって、イスラエルにねたみを起こさせるというあなたの務めにしたがって、あなたが出会ったユダヤ人にメシアの話をしなければならない時、何と云えばいいのかがはっきりと分かるでしょう。あなたには武器があるからです。

自分たちの救いに確信のないクリスチャンが本当にたくさんいることは悲しいものです。彼らはユダヤ人になることを希望するのです。ユダヤ人志望の人たちが世界中にどのくらいいるかご存知ですか。現実には、神は、あなたに、ユダヤ人たちにねたみをおこさせるようにと命じておられるのであって、ユダヤ人たちによってねたみにかられるようにとは命じておられません。あなたがたが、選ばれた種族なのです。王である祭司です。神がご自分のために選り分けられた民です。あなたがたは、接ぎ木されているのです。あなたがたは、神のみことばを知っているべきです。あなたがたには、権威と地位が与えられているからです。地位と権威です。多く与えられた者は多く求められます。皆さんはみことばを学ばなければなりません。みことばを知らなければなりません。そうすれば、皆さんはみことばを伝えることができるし、あなた自身の人生において励ましと希望を持つことができるからです。

お祈りしましょう。

お父様、私たちにすばらしい聖書のみことばを与えてくださって、本当にありがとうございます。それは、ただ私たちが賢くなるためではなく、知識を増やすためでもなく、これらの

みことばは、私たちに忍耐と希望を与えてくれるものです。お父様、あなたが一人ひとりの非ユダヤ人教徒の心に、ユダヤ人にねたみを起こさせるための大きな重荷を置いてくださっていることを感謝します。私たちが語ったこと、聞いたことが、不毛の地に落ちることがありませんように、それらが何らかの形で実を成らせますように、あなたのみことばのすべて、すべての助言を知りたいと思う渇きがありますように、今、お願いいたします。お父様、私たちのために、その光を輝かせるべく、世の光を送ってくださってありがとうございます。そして、私たちが彼を個人的に知っていることを感謝します。お父様、もしここに、彼を個人的に、救い主として、贖い主として、人生の望みとして、世の光として、心の園を歩く「ことば」として、知らない人が一人でもいるなら、その人の心が触れられ、御霊が示してください、人生が変えられますように、今、お願いいたします。私たちはあなたに感謝し、あなたを賛美します。そしてこれらすべてのことを、イスラエルの聖なるお方の聖なる御名において、王の王、主の主、ユダの獅子、平和の君、神の子羊、インマヌエル、すべてのものにまさる御名、ヤシュア、イエスの御名において、お祈りします。

さあ、神の民はそろって言いましょう。「アーメン。」